

裁判記録から探る近代英語期口語表現の歴史 語用論的研究：コーパス・アプローチ

椎名, 美智 / SHIINA, Michi

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費補助金研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2009-05-20

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年 5 月 20日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520367
 研究課題名（和文） 裁判記録から探る近代英語期口語表現の歴史語用論的研究：コーパス・アプローチ
 研究課題名（英文） A Historical Pragmatic Study of Trial Texts in the Early Modern English Spoken Data: A Corpus-Approach
 研究代表者
 椎名 美智（SHIINA MICHI）
 法政大学・文学部・教授
 研究者番号：20153405

研究成果の概要：本研究は、「呼びかけ語」をディスコース・マーカ―と解釈し、現在では知ることのできない近代英語期の口語表現における、その特徴を捉えようとしたものである。裁判記録を集めた約12万語からなるコーパスをデータとして使い、「呼びかけ語」の使用について、歴史語用論的視点から量的・質的分析の両面から探ろうとした研究である。研究の第一歩は、基本的なデータ環境を整えることであった。コーパス中の「呼びかけ語」を探し、その言語的な特徴をマークした。次に、そのデータを使って、「呼びかけ語」を使う対話者の社会言語的・語用論的特徴を量的に分析し、一般的な使用傾向をみた。さらに量的分析に基づいて、一般的な使用傾向から外れた例外的使用例について、文脈のなかで、文体論的視野から質的分析をしようとしている。また、先行研究のドラマの分析との比較によって、裁判という特殊な言語的環境における特殊性を探ろうとしたものである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：歴史語用論、コーパス・アプローチ、呼びかけ語、歴史言語学、談話分析、社会言語学、文体論

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における歴史語用論の確立の必要性：日本の言語学研究においては、歴史語用論は今もまだ認知度が低く、広くは知られていない。コーパス・アプローチも、徐々に広まってはいるものの、まだコーパス言語学者にしか普及していない状況である。その意味

では、本研究開始当初、「コーパスを使った歴史語用論」はまだ日本においては認知度の低い研究分野であった。そこで、この分野の研究成果を発表していくことによって、同じ分野の研究者に注目してもらい、歴史語用論が認知されるような研究活動が必要であった。その意味では、パイオニア的な意味合いのある研究テーマであった。

(2) 日本人研究者が海外でも貢献できる分野：歴史語用論は、いまだ開発途上の研究分野なので、研究環境は整っていないが、そのことは逆に、日本人研究者が世界の言語学研究において貢献できる余地が多く残されているということでもある。そうした状況下で、国内外の研究会などで発表したり、ワークショップを企画したりすることによって、研究者仲間をつくり、歴史語用論を普及することは意義深いことであった。

(3) 日本人研究者のポライトネス理論への貢献の潜在性：ポライトネス理論を使った語用論研究においては、日本人研究者は貢献度は世界的にみて非常に高い。それは日本語のもつ敬語体系や概念を、外国語に応用することによって、表現の裏に隠れたものを可視化、概念化して、そうした敬語体系をもたない言語を研究対象にしている研究者に示すことができるからである。そういう意味では本研究は対象言語は外国語の英語だが、日本人研究者が貢献する余地は多く残されていた。

(4) 独自のコーパス開発：コーパスは多様化しており、今やオーダーメイドの時代に入っている。コーパス言語学者とのコラボレーションも考えられるが、最も簡単なのは自分の研究テーマにあったコーパスの開発、つまり研究の前段階のデータ作りそのものも研究テーマに含めるような、研究を広く捉える視点が必要であった。本研究の研究代表者はイギリスでコーパス作りに携わったことがあるので、そのノウハウをこの研究に応用しようとしていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、近代英語期における口語表現において「呼びかけ語」が、どのような社会言語的、語用論的特徴と役割をもっているかを総合的に捉えることである。特に、本研究で焦点を当てていたのは、裁判記録という特殊なジャンルのテキストの分析であった。

(2) 近代英語の研究はこれまで書かれたデータが主に使われていた。しかし、本研究では、話されたデータの分析をするという目標を掲げている。つまり、「何をデータとして認めるか」、「データの発掘」という、他分野では研究以前の問題と思われる点から議論を始めることによって、歴史語用論という新しい研究分野の確立と発展に貢献することもまた、研究の目的であった。

3. 研究の方法

研究は以下の4段階に分けられて、進められた。

(1) 近代口語英語を集めた信頼性の高い言語学的標識のついたコーパスを作成する。

(2) 自分で作成したコーパスを使った量的分析をする。

(3) 量的分析に基づいた質的分析をする。

(4) 量的分析と質的分析を総合させて、研究論文をまとめて、発表する。

4. 研究成果

(1) 国内外の歴史語用論研究者からのフィードバック：研究の最大の成果の一つは、研究代表者が自分の研究の途中経過を論文にまとめて国内外の研究会、学会で発表することによって、歴史語用論に携わっている国内外の研究者からのフィードバックを受けて、研究が発展的に広く、深く進んだことである。

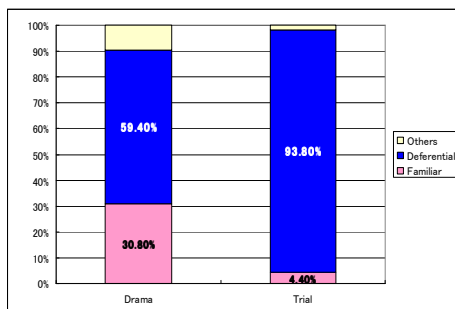
(2) 歴史語用論研究者ネットワークと今後の研究の発展への糸口：本研究における対象言語は英語、とくに近代英語だが、とくに海外の学会において発表したことにより、他言語で同様の研究に携わっている歴史語用論研究者やポライトネス研究者に興味をもってもらい、彼らとのネットワークができたことは、本研究の今後の発展にとっても非常に意味深いことだった。今年度はとくに、英語、日本語、ドイツ語における歴史語用論学者が集まり、フィンランドから研究者をまねくワークショップを開催し、研究発表会を行うことができた。また、この研究発表を国際語用論学会に一つのパネルとして発表できる基礎づくりができた。このことにより、本研究を広い研究分野の中で位置づけることができるようになった。

(3) 英日裁判記録の研究への糸口：裁判記録の研究は、日本ではまだ余り行われていない。そこで、英語の研究を進めると同時に、日本語の裁判記録の研究を並行して進めることにより、比較研究の糸口ができた。

(4) 過去の研究との関連づけ：本研究を、これまで研究代表者が行ってきたドラマテキストの歴史語用論研究と関連づけることによって、裁判記録を相対化することができ、特徴をより明確に捉えることができた。「作られた口語テキスト」対「記録された口語テキスト」、「日常会話」対「特殊な状況下の対話」、「さまざまな文法構造の使用」対「疑問文の使用」、「さまざまな地位、階級、役割の人の言語活動」対「高い身分の人の言語活動」などと、多くの視点から比較をすることによ

って、本研究で焦点を当てていた裁判記録だけの研究では見えなかった局面や言語的特徴がより明確化された。本研究の成果は、一部はすでに 2009 年 3 月に学習院大学で開かれた「歴史語用論ワークショップ」にて口頭発表された(Shiina 2009a)。また、7月にオーストラリアのメルボルン大学で開催される国際語用論学会で、椎名がオーガナイザーの一人として発表される歴史語用論研究のパネルでも発表される予定である(Shiina 2009b)。

量的分析の一例として、同時期の戯曲と裁判記録における呼びかけ語の頻度の比較をグラフで示すと、以下ようになる。



このグラフに表されている通り、日常会話の反映と推測される演劇のテキストと比べると、非日常的で特定の役割が話者に付与される裁判テキストで使用される呼びかけ語の使用は制限されている。ほとんどの例がパターン化された使用であり、例外はあまり見られない。また、コーパスに収録された15のテキストのうち、一つのテキストには呼びかけ語が一つもなかったことから、裁判記録における編集の問題が浮き彫りになった。

(5) 今後の研究課題の発見：本研究でわかったことは、裁判というのは非常に特殊で、制限の多い言語活動なので、「呼びかけ語」に関しては、裁判記録は多様性の少ないデータだったということがわかる。しかし、今後、より広いジャンルのテキストを分析し、他の特殊な言語状況と比較したり、日常会話と比較したりすることによって、言語の多様性のなかの一面として位置づけることができるという点では、今後の研究課題を示唆する研究成果が上げられたといえる。比較研究という視点からいえば、同時代の他言語、同言語の他時代の裁判記録との比較を視野に入れば、本研究は比較研究における基礎的一段階としての大きな意義を持つといえる。また、コーパスに収録されたテキストのなかには、呼びかけ語の一つもないテキストがあったことから、裁判記録における書記の役割、編集の問題が出て来た。これも、今後の歴史語用論研究におけるデータと方法論の問題として取り上げるべき課題の一つといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Shiina, Michi (2007)
‘Positioning and Functioning of Vocatives: A Case Study in Historical Pragmatics (1)’ , 『法政大学文学部紀要』55号, pp.17-32, 査読無
- ② Shiina, Michi (2008)
‘Positioning and Functioning of Vocatives: A Case Study in Historical Pragmatics (2)’ , 『法政大学文学部紀要』56号, pp.29-48, 査読無
- ③ 椎名美智 (2009)
「歴史語用論の新展開——方法と課題」
『月刊言語』Vol. 38, No. 2, pp. 66-73, 査読無

[学会発表] (計6件)

- ① Shiina, Michi (2007, July 10)
‘Pragmatic Functions of Vocatives in Historical Data’ , *Panel: Historical Corpus Pragmatics: Methodology and Case Studies*, 10th International Pragmatics Conference, ヨーテボリ大学 (スウェーデン)
- ② 椎名美智 (2007年10月27日)
「裁判における日本語の特徴—『疑問文』の語用論的役割」, 東アジア日本語教育・日本文化研究学会, 北京外国語大学
- ③ Shiina, Michi (2008, July 4)
‘Creativity in Impolite Linguistic Behaviour : Observations on Early-Modern English Data’ , International Symposium on Politeness, Research Institute for Linguistics, Budapest
- ④ Shiina, Michi (2008, July 26)
‘Characteristics of Courtroom Discourse: Rhetorical Questions, Poetics and Linguistics Association, Sheffield University, U.K.
- ⑤ Shiina, Michi (2009a, March 10)
‘Characteristics of Vocatives in Early Modern English Trial Texts’ , 歴史語用論研究会, 学習院大学
- ⑥ Shiina, Michi (2009b, July 14)
‘Vocatives in Early Modern English Trial Texts’ , 11th International Pragmatics Conference-Melbourne, Australia

〔図書〕（計2件）

① Shiina, Michi, (2007)

‘Is Gender an Issue?: Vocative
Exchange in Early Modern English
Comedies’ in Nakao, Yoshiyuki *et al.*
(eds.) *Text, Language and
Interpretation: Essays in Honour of
Keiko Ikegami*, Eihousha, pp.415-429

② 椎名美智 (2010 出版予定)

『『呼びかけ語』の機能——歴史語用論的ア
プローチ——』『秋元実治先生退職記念論
文集』ひつじ書房, 全12頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

椎名 美智 (SHIINA MICHI)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：20153405

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし